

「正しい言葉」と「きたない言葉」：川村 湊氏
「黄表紙王国の崩壊」（『近世狂言綺言列伝』所
収）を一読して

園田，豊
北九州市立大学

<https://doi.org/10.15017/8910>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.105-109, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：published
権利関係：



「正しい言葉」と「きたない言葉」

— 川村 湊氏「黄表紙王国の崩壊」(『近世狂言綺言列伝』所収)を一読して—

園 田 豊

会の定説ともなつて、筆者もこれについては全く異存はない。

(A)

これは、もはや、近世の文学を考える上で常識の域に属するものであるが(『中村幸彦著述集』《全十五巻。中央公論社刊》等)、近世文学には「雅」文学(漢詩、漢文・和歌、和文・連歌といった古典の伝統を継ぐ第一義の文学)と「俗」文学(俳諧や仮名草子・浮世草子・初期読本・談義本・洒落本・黄表紙・後期読本・人情本・滑稽本・合巻などの、近世に入ってから新しく生まれた啓蒙的・趣味的・遊戯的な、第二義的(曰く、中村幸彦氏)ともいえる文学群)があつた。これは、当時の人々の感覚においても、百人が百人、雅(上)、俗(下)と把握されていたことは確たる事実であり、今や学

さて、この「俗書下品類」(『松浦史料博物館目録』の分類用語より)中の「黄表紙」というジャンルは、現在の近世文学史では、安永四年(一七七六)、鱗形屋孫兵衛刊『金々先生栄花夢』(恋川春町戯作・画)から文化三年刊『雷太郎強悪物語』(式亭三馬作)に至るまでの草双紙を「黄表紙」と呼称し、その約三十年間に約三千種(作)の作品が刊行されているので、近世絵草紙史の中でも一時代を画したジャンルであることは間違いない。といった意味では一つの「王国」を築いた、ということもできようが、この「王国」が『近世文学王国』全体に占める位置は何と小さく危ういものであることよ。漉き返しの浅草紙に刷られた「黄表紙王国」は、所

詮便所に散る「あだ花」、いつ崩壊してもおかしくなかった。寛政の改革の風俗取り締まり、官吏登用の風がそつと吹けば、たちまちその核となるものが、雲散霧消してしまったのは歴史的事実といって過言ではなからう。

…と、自分でも書いていて嫌になる贅言を呈し、「ご迷惑をお掛けしたのは、川村湊氏『近世狂言綺語列伝』(一九九一年 福武書店刊) 所収の「黄表紙王国の崩壊——恋川春町その他」に対して、筆者なりの意見を述べてみたいと思ったからである。その際の《キーワード》(当今の流行物)は、

言語遊戯

恋川春町作・画 しんがたかいらたしのね 『辞闘戦新根』

「正しい言葉」

「いやしい言葉」

「曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』」

「」を付した語は氏の川村氏の文章に出てくるものであ
る。

——といったものなるうか？この中で、とりわけ筆者に疑問を抱かせるのは、「言語遊戯」として『辞闘戦新根』の中に出てくる「大木の切口太いの根」や「一杯飲みかけ山のかんがらす」といった当時の通言(洒落言葉・流行り言葉)が「いやしい言葉」とされている事である。「いやしい言葉」とは如何なる謂いであるか？それと対峙する「正しい言葉」とはいかなる謂いであるか？確かにこれらの言葉は俗言ではあるが、決して「いやしく」はない。むしろ、ある意味では「知的(＝滑稽)」な「言語遊戯」ともいうべき「言葉の流星群」(池澤尚紀)であり、それがまた、春町の可愛らしい画で擬人化され、描かれているのだから、笑いを堪えられない。中でも「鯛の味噌ず」の画に至っては、まさに近世のみならず、滑稽画の歴史のベストに入るであろう滑稽の極みに到達している(図1)。また、余計なことを付け加えれば、十年程前のテレビアニメ「南国少年パプア」に、それとそっくりのキャラクターが登場し、我が見たちを含めた当時の婦女童幼の頭を解いていたと記憶している。



図1 恋川春町作・画『辞闘戦新根』（安永七年刊）四丁表・五丁裏
（都立中央図書館、加賀文庫蔵本）

閑話休題。

この春町の作品の滑稽さは一にこゝにあるのであり、川村氏も、「『辞闘戦新根』の趣向である「異類合戦物」は黒本の時代にもあった。」（園田註：それ以前からある、草双紙に限っても赤本時代からあった。）「流行語を擬人化するという発想は、必ずしも春町の独創とはいえないのである。」とはいえ、「大きく異なっているのである。」と毀誉褒貶、ほめているのか、けなしているのか、分かりかねる本作品評価をお書きになっている以上に、この作品は春町自身のそれまでの作品とは滑稽性において大きな径庭を持った作品となっているのである。一つの証左を挙げてみよう。

黄表紙作者としての山東京伝の名を一躍花のお江戸に高からしめた『手前ノ勝手 御存商売物』（天明二年刊）がこの作品の趣向を踏んでいることは、研究者の間では先刻御存知のことである。黄色表紙の第一人者の京伝がよい意味で「種本」としたことから知られるごとく、安永期初期黄表紙の第一人者恋川春町の作品の中でもこの『辞闘戦新根』は異色作（と申せば、黄表紙は皆そうではないかとの御批判も出ることであろうが。）にして傑作と断しても間違いあるまい。

も一つ、氏の文章で、

(1) 「短歌(近世和歌のことをおっしやっているのである)や俳句(俳諧のことをおっしやっているのである)や小説(読本のことをおっしやっているのである)」、あるいは川柳や狂歌に較べても、「三十年」という寿命は短すぎる気がする。」

(2) (とおっしやり乍ら続けて)「黄表紙の盛衰は一つのジャンルの消長ということだけでなく、江戸の文学意識そのものの栄枯盛衰を象徴的に表現している。」とおっしやっている箇所は、少々「針小棒大」の感があるのではないか。

確かに…。近世の「戯作文学」と言えば、「洒落本」「黄表紙」…ということになるのだが、徳川三百年、その十分の一の期間を占める「黄表紙」の盛衰で代表させる(象徴させる)のはどう考えても恣意的ではなからうか。とはいえ、どのような文学ジャンルも栄枯盛衰があるのであって、何も黄表紙に限ったことではないと考えられるのであるが。

(3) いやしい言葉…春町の『辞戦闘新根』に登場してくる辞は、ある意味では、確かに「いやしい」。しかしまた、当世流行の「金々然」とした「風流」なお洒落な言葉群で

もある。当今でも「いやしい言葉」は存在する。——「時代と寝ている」「癒して欲しい」等が、その典型である。しかし、ここで川村氏のおっしやっている「いやしい言葉」とは、当時の流行言葉。中でも、繰り返すが、当時江戸で流行った洒落言葉である。しかし、いやしくも何ともないのではないか!? 当今の「卑しい」言葉とは全く性格を異にする機知諧謔に満ちた言葉なのであることは全く否定できまい。それでも、近世における「雅語」に比べれば、勿論、「卑しい」…。確かに「いやしい」、しかし、その「いやしさ」を「いやしい」からといって唾棄すべきものとして一顧だにするのではなく、それが当世流行の金々然とした大人の「機知」から生み出された所が、春町の『辞戦闘新根』を含んだ《黄表紙》の「こいつが日本」(大田南畝に「此奴者日本」という黄表紙あり。勿論、これも当時の流行言葉)というべき背景でもあったのである。

(B) 曲亭馬琴と黄表紙

さて、こつした黄表紙作者の性格と最も無縁であったのが、曲亭馬琴であった。

「京伝門人ノ大栄山人」として黄表紙に筆を染めた(寛政

三年刊『こころはてしなくあつた盡用而二分狂言』馬琴は少なからぬ作品を残してはいるが、それらは皆、寛政の改革以後のことであり、京伝が『娼妓絹麗』と『仕懸文庫』を著して処罰を受けた時期以降のことである。それに馬琴の黄表紙はどれも理に詰んだところがあり、黄表紙全盛期の、朋誠堂喜三や唐来参和の作品に見えるナンセンス・ユーモアが全く欠落しているのである。その馬琴が通言や洒落言葉、流行語を趣向にして黄表紙を書くはずもない。彼はそうした言葉群を、当然ながら、川村氏が使用されている「いやしい言葉」と考えていたであろう。彼が文学的放浪の末に見出したのは、新しく江戸で台頭してきた長編読本というジャンルであったことは言うまでもない。

迫野先生、この度は御退官誠にお目出度うございます。御学恩に感謝いたします。今後とも、『近世文学に表れる言葉』の滋味に注目しつつ、研究を続けて参りたい所存であります。

(二〇〇六年正月吉日)

(そのだ ゆたか・北九州市立大学)